2018 年度　日本発達心理学会国際研究交流委員会公開講演会　講演記録

2018 年 9 月 2 日

講演者：Kathryn A. Kerns （ケント州立大学）
司会者：近藤 清美 （帝京大学）
通　訳：野口 由紀子

児童・生徒におけるアタッチメントのメンタルヘルスに及ぼす役割
The role of attachment for mental health in school age children

日本発達心理学会にまず感謝申し上げます。日本に 3 日間お招きいただきまして，日本の発達心理学の方々，研究者の方々も多くいらっしゃいましたけれど，彼らの研究を私が学ぶ機会であったと思っております。本日のタイトルは「学齢児の精神的健康に対するアタッチメントの役割」です。子どもに能力をつけたい，子どもたちにぜひ幸せになってもらいたい，これは世界中の人の願いだと思います。それが社会的な目標であるのならば発達心理学者たるものどういった要因が子どもの能力を高めるのか，どうやったら子どもが幸せになるのかを考えるべきでありましょう。沢山の研究がなされましたが，その 1 つの舞台である家庭が要因の 1 つであると考えられます。

スライドで大切なことがあります。私が使うスライドは皆様のお手元にあるスライドからかなり抜いたものがございます。ぬかしたなと感じることがあると思います。あらかじめお知らせいたします。

では，私たちはなぜ学齢の子ども，スクールエイジとも言って 6 歳から 12 歳の子どもたちですが，子どもたちの幸福や精神的な健康というのに気を払うのかというと，子どもたちは非常に難問を突き付けられる時代であるからです。

まず，親子関係が変わり始める時期です。子どもと親との関係，学校ではより大きな要求を突き付けられます。そのため，6 歳から 12 歳は学校からの圧力が増す時期だからです。子どもにとっては仲間との関係がますます重要性を増します。自分の立ち位置，自分の居場所を見つけるのが重要です。また，ほかの人にどう思われているのかそのフィードバックが気になりますし，現実的な要求をますます多く突き付けられます。他人から向けられる要求は，往々にしてマイナスであることが多いのです。その時に自分としてはぶれてはいけない，すなわち自尊心です。自尊心を保ちながら要求に応えなければならないというのは，なかなか大変です。そして，最後に書いてありますが，子どもたちは自分にできるという成熟度を見せなければなりません。自分が自分でコントロールできるということと，成熟を見せなければならないし，それが期待されます。

では今日，特に私がお話ししたいのは親子関係についてです。親子関係がどのようになれば，ここでの子どもは学齢児たちですが，幸福になることができるのか。私が研究しているアタッチメント理論から導入されたアイデアで，学齢児での親子関係で何が大切なのかを皆様にお話ししたいと思います。それから，親子のアタッチメントが子どもの能力や精神的な健康にどのように関係しているのかを，分かっている限り説明するのと，他の要因も子どもの精神的健康には絡んでいると思いますので，

それとアタッチメントとの関わりについてもお話ししたいと思います。

第 1 に，アタッチメントとは何かという定義を申し上げたいと思います。そして児童期においてアタッチメントはどういった重要性があるのか。私たちは児童期についてのアタッチメントについてどのように見ているのかについて，その変化についてもお話ししたいと思います。

ところで英語でアタッチメントと言うと，非常に幅広い意味があります。そのアタッチメントを，私は狭い範囲の具体的な意味で用いたいと思います。ボウルビーとエインズワースの視点では，彼らはアタッチメント理論を打ち立てた人たちでありますけれども，彼らに言わせると，非常に具体的な特定の結びつきというものをアタッチメントと呼ぶのでありまして，非常に具体的な意味をもっていると提案しました。例えば，アタッチメントを情緒的きずなとすれば，非常に親密な関係という訳になることもございますけれども，彼らに言わせるともっと具体的です。一番下を見ていただくと，例えば生物学的な意味をもつアタッチメントでありましたら，「子どもが保護を受けているんだ」と養育者に対して感じる感情のことが生物学的な意味をもつアタッチメントであるということです。生物学的な機能とは子どもにとって生き残るというアタッチメントの機能ですが，心理学的な意味もあります。子どもたちに安心感を与える，「世界はいつも安心できて頼れる人がいるんだよ」という心理学的な機能がアタッチメントにはあります。児童期の子どもたちにすれば，これは概ね両親でありますし，あるいは後見人のことでもあります。アタッチメント理論によれば，すべての文化ですべての子どもがこのアタッチメントを涵養するものです。

では，養育者が子どもたちのアタッチメント対象としてどのような役割を果たせるかというと主に 2 つあります。1 つ目は　確実な避難所です。いつでも子どもたちがそこに行けて，安心して頼ることができて，落ち込んだ時には慰めてくれるところです。2 つ目はやる気になっている時です。これから世の中に打って出るという時の安全基地という役割をもっているのです。この 2 つには明らかに関連性があります。困った時には頼れる人のところに行く。そして慰めてもらって自信をもって，新しいことを自分でするんだと，世の中に探索の旅に出ることができる，というように繋がっています。

全ての子どもたちはアタッチメントを形成すると言いましたが，しかし，アタッチメントは全て同じではないし，そのアタッチメントすべてが最適ではなく，特にその種類があるということは，質が違うということです。安定したアタッチメントを形成できた子どもたちは，アタッチメント対象の利用可能性，つまりいつでもいてくれるという気分ですね，それから，反応性，いつでも反応してくれるという信頼感において繋がるのです。ですから，確実な避難所として，何らかの困ったことがあったり落ち込んでいる時には，この人のところに行ってストレスを解消し，そして安全基地としてそこから自分の探索のために新しいことに挑戦していくという，効果的なアタッチメントの形成が出来ます。もちろんアタッチメントは若い時に，すなわち幼少の時に形成することが大切です。ボウルビーによればそれは生涯を通して重要で，まさにゆりかごから墓場まで，私たちは一生を通じてだれか頼りになる人が欲しいというのが人間というものでしょう。

これからお話するのは，アタッチメントは大切ではありますが，人生の節目でアタッチメントは変わってくる，ということをお話ししたいと思います。

まず乳児期です。乳児期は概ね生後 18 か月ぐらいまでです。この時期に養育者にアタッチメント

が現れます。生後 1 年間と書かれていますが，特定の人になつく，特定の人へのアタッチメントが形成されるのは概ね生まれてから 1 年間です。次はよちよち期，幼児期前期です。だいたい 18 か月から 3 歳くらいまでです。安全基地行動の強化，つまり安全基地を確認してそこから行動範囲を広げていき，それから自分でどんどん動き始めるという時期です。安全基地としてのアタッチメントです。次は幼稚園期あるいは幼児期後期，3 歳から 5 歳の時期です。アタッチメント対象とのコミュニケーションが子どもたちはうまくなります。そして子どもたちは親が何を考えてどんなアイデアをもっているのかに気付き始める，というパートナーシップを構築し始める時期です。

では児童期，6 歳から 12 歳のアタッチメントには 4 つの特徴があります。まず第 1 に親がそこにいてくれるかどうかが大切です。お互い同士が設定する合意になります。そして，第 2 に，親がアタッチメントの対象の第 1 であること，第 3 には親が確実な避難所，安全基地になるアタッチメントであること，最後に，共同的な親と子どものパートナーシップが出現します。

一つひとつ説明したいと思います。第 1 に，アタッチメントシステムのセットゴールと書いてありますが，これは幼い子どもたちには利用可能性が大切ということです。幼いころには，アタッチメントのもつ目標が何かというと，親と近くにいたい，身体を寄せていたいというのが目標ですが，その目的が年とともにそうではなくなります。親は自分がほしい時にいてくれる，これが利用可能性となります。それは親と子どもとの関係のリセット，再編成にあたります。親と離されても子どもはその耐性を強めます。学校にいる時が増えますからそれはすぐに分かるでしょう。

2 番目の特徴でありますが，アタッチメント対象はだれかということです。児童期の第 1 は親であります。しかしその他にもなつく人はいて，仲間，祖父母，きょうだいなどがいるわけですが，それらはアタッチメント対象としては第 2 次的です。親と仲間の両方が児童期に重要ですが，役割が違います。親はアタッチメント対象としての役割があり，仲間は遊び仲間の役割があります。例えばこの時期の子どもに，悲しくなった時に誰に周りにいてほしいかと尋ねれば，おそらく親と言うでしょう。しかし，いま誰と遊びたいかと聞かれれば友達の名前を言うでしょう。

3 番目の特徴ですが，児童期のアタッチメント対象は確実な避難所であり，安全基地である，この両方を期待します。この避難所というのはそこに入れて慰めてくれる場所で，安全基地というのはサポートしてくれて，外に送り出してくれる対象です。以前ほどの頻度がなくても子どもの避難所であり続ける親の役割は大切です。しかし，学校など，他の環境に行くときに，親のサポートを必要とする安全基地としての役割が，年とともに増えていくでしょう。母親も父親も，この 2 つの役割を果たすものだと思いますが，中には，母親はどちらかといえば確実な避難所で慰めてくれる役割が，父親は「大丈夫だから外に出て行け」という安全基地としての役割が大切だと主張する人もいます。

4 番目の特徴ですが，児童期になると親と子どもは共に働く，協力しながらの共同パートナーという役割が重要になってきます。そのため，お互いが行動を律する，正しく規律するためには子どもの役割も重要になります。子どもは親と協力しながら，色々な場面で，自分で自分の身を律するという責任も大きくなります。パートナーという概念が出てくるからこそ，親と子どものコミュニケーションが大切になりますし，重要性が増し，うまくなります。お互いに協力しながら意思決定をするという関係になります。これがパートナーシップだと思っています。幼い子どもの時に問題が起きたら，

親が駆けつけてきてくれて親が何とかしてくれるのを待つという態度だと思います。しかし，児童期になって何か問題が起きると，親のところに行き，親と一緒に解決しましょうということになります。これは子どもの役割が増した例であります。

では，子どもたちはアタッチメントをどう考えるのか，それを見ていただくために，ビデオをお見せします。ある部分的な物語を私たちは形成して，物語の中で何らかの問題が起こった時に，じゃあ誰に言って，どうやって助けてもらいたいかという物語を見てもらいたいと思います。1 つ目のビデオです。途中までストーリーを語ります。そしてそのあと「さあどうしてもらいたいと思う？」と子どもに聞いて，物語を完結してもらうという調査方法です。ここで私たちが提供いたしましたのは，ある子どもが友達のところに行き，友達の家で遊んでいるうちに喧嘩になり，友達に出て行けと言われます。あなたは家に帰ってきて乱暴にドアをバタンと閉め，その音が大きいので親が帰ってきたことに気付いて「お帰り」と声をかけます。そこまでが物語で，そしてそのあとどうなると思うかを子どもに聞きます。

そういうことを私は説明すると，日本の同僚からは「日本の子どもはドアを乱暴に閉めない」と返ってきますが，あくまで例えです。子どもは本当に心騒ぐ思いで家に帰ってきて，そのあと何が起こるか，という話です。この時にある子どもが安定したアタッチメントを形成していれば，まず母親と話をし始めます。親子でどういう問題が起こったのかという討論を始めて，そして親子で解決法を探ります。その話の間に安定したアタッチメントの子どもであれば，気分がよくなり，そして解決法を学び始めます。

★★ここでビデオ上映★★

この場合には，子どもが最後に解決する方法を見つけます。友達の家にもう 1 回行って「ごめんね」と言って仲直りをするよね，と言ったのは子どもですけれども，その間には母親がサポートしています。母親と子どもが協力して，その間に母親は子どもに力を与えたことになります。そこで力を感じた子どもは，「仲直りに行く」という協力を元に探した解決法を実行することでしょう。

では，何が安定したアタッチメントの発達を促すのでしょうか。もちろん不安定ではなく，安定したより良いアタッチメントを形成して欲しいわけですが，アタッチメント理論によりますと，第 1 に良いアタッチメントになる要因は養育の質であると言われています。アタッチメント理論によれば，何よりも養育の質で重要なのは感受性が高い，敏感な養育をするということです。子どもが何とか親の注意を引こうとするときに，ちゃんと反応してあげられるかということで感受性と申し上げます。そして受容的，子どもを受け入れるという養育態度です。協力的であって介入をするのではないということです。そして感受性の高い養育というのは，特に幼い子どもたちでは安定したアタッチメントを形成するのに，きわめて深い関係があるという結果が出ています。

では，もっと年上の子どもであったら，アタッチメントが形成されるのと養育の質がどう関係があるのでしょうか。たとえ年齢が高くなったとしても，親たちの感受性が高く，敏感であるということの重要性は変わりません。私たちは様々な文献を調べてきまして，アタッチメントは年齢が上の子ど

もで，非常に質の高いアタッチメントを涵養するのに必要な養育の要素を調べてきました。そうしますと，確実な避難所と安全基地を子どもたちに与えるためには，まず自立性，すなわち自立を促すような養育であるということです。それから第 2 に，厳しく子どもたちをコントロールしようとしないということ，そして行動的なコントロールはさせるわけでありますけれども，それを強要しないということの 3 点が文献に出てきました。すなわち理由を理論的に，縷々説明をして，そして行動を変えさせようとする。決して押し付けるのではないということが重要なのです。

ここまでは，安定したアタッチメントについて話してきました。しかし，必ずしも安定したアタッチメントばかりではないわけです。安定性がなくても，子どもたちはそれなりにアタッチメントを形成しますけれども，その際には，色々な特徴があるアタッチメントを形成します。研究結果によりますと，不安定なアタッチメントには 3 つがあり，それは回避型と両価値型と無秩序型があるとされています。いずれも不適切な養育環境の下でこの 3 つの不安定なアタッチメントパターンが形成されるわけです。

まず，回避型のアタッチメントです。これはストレスがある時にアタッチメント対象に頼ることが出来ない状態です。過去，何らかの情動的なニーズがあって，私を助けてほしいんだという情動的な問題があった時に，拒否されたという経験があるから，回避型のアタッチメントが形成されます。いかに困ったことがあっても，困難なところに行っても，子どもたちは情動的なアタッチメントが形成できなければ，その対象のところにはいきません。助けてくれないということが分かるので行かないのです。ということは回避しているということです。

2 番目の両価値型ですが，アタッチメント対象について，どういうふうに出てくるか分からないという不利益を感じています。時にはこの対象は助けてくれたこともあれば，あるときには助けてくれないというふうに，この人はどちらに出るか分からないという不安定さを抱えた場合です。このように，両親の反応性に一貫性がないという時に，子どもたちがどういう反応に出るかといいますと，ずいぶん大げさな行動に出ることがあります。泣いたりわめいたりというのが極端に出ます。とにかく一貫性のない親だから，なんとか向き続けてくれという助けを求めるサインだと思われます。

3 番目は無秩序型です。これは親が養育保護的な存在になりえていない場合になります。それはどういう時かというと，子どもが助けてくれと言った時に非常に厳しい態度で対するとか，あるいは厳しいどころか虐待的であるとか，ネグレクト，あるいは親が自分自身の問題で，ストレスとかうつ病でそれどころではないと圧倒されているような場合に，不安定なアタッチメントになります。特に幼い子どもにとって，親が養育してくれない，世話をしてくれないというのが大変恐ろしい不安な状況であるということは，すぐにお分かりになると思います。子どもは親の養育なしでは生きていけないからです。

では，ビデオをお見せしたいと思います。回避型，そして両価値型も入っておりますけれども，どういうビデオかと言いますと，赤ちゃんが出てくるんです。そして赤ちゃんが，見知らない場面（ストレンジ・シチュエーション）に置かれた時にどういう反応を示すのかを見ていただきます。これからウォーターズ博士のビデオをお見せいたしますが，養育者から離されて，自分たちが未知の環境に置かれ，そのあと養育者に再会した時にどういう反応を示すのかを示します。そして，それぞれのア

タッチメント方略に関してどういう行動なのかを見てください。安全基地という見地から取られた研究用のビデオです。安定している場合，回避的な場合，両価値型の場合をそれぞれお見せします。

★★ここでビデオ上映★★

ビデオを見たことがある方がいらっしゃるかもしれません。あるいは発達心理学を専攻している方はこういうビデオでこのような行動を起こすと予想をしていたかもしれません。いずれにしても，このビデオの対象は赤ん坊です。そして，赤ん坊の安定か不安定かのアタッチメントです。それでは，もう少し年齢が上の子だったらどうなるでしょうか。

このグラフの年齢の上というのはだいたい 9 歳前後でしょうか。その子どもは回避的な行動をする時にどのようなアタッチメントをするかというと，ストレスを感じ何か困った状態でも，アタッチメント対象に何も期待しません。アタッチメント対象の元へ行きません。それから幼稚園期よりも上の年齢では，アタッチメント対象とのコミュニケーションがうまく出来ません。コミュニケーションのレベルが低いです。特に，内的な気持ち「私はこういう気持ちです」とアタッチメント対象に説明するのが下手です。児童期になると，コミュニケーションへの親密性は低いままです。それからアタッチメント対象である養育者に頼ることもしません。しかし，覚えていらっしゃるかもしれませんが，子どもの時に回避的なアタッチメントであったら，たとえ母親が戻ってきても，顔を覆って母親の方を見ませんでした。しかし，それは赤ん坊の話です。これが 10 歳くらいになると，顔を覆って養育者の方を全然見ないという行動は異常な行動に見られてしまうでしょうし，時にひきこもりのように見られてしまうかもしれません。児童期の子どもで回避的なアタッチメントの子どもは，だいたい両親に対して反応性が極めて低いです。行動的にあまり興奮しないと言いましょうか，感情を表しません。しかし，反応が鈍いということは時に「自立型ですね」とか「独立心を求めているのですね」と解釈されることもあります。

一方，両価値型の子どもですけれども，この子たちはコミュニケーション力が低いわけではなく，むしろ反対です。助けが必要なのだと強いサインを出し続けます。必要性と異常性のシグナルを送り続けるわけです。しかし，何よりも児童期まで成長しているので，子どもたちの方略は変わります。あえて非常に対立的な，反抗的な，あるいは挑発的な行動をとることになります。これは確信犯で，こういうことを言えば親が非常にネガティブに反応すると分かっているのですが，それが彼らの方略なのです。親の関与性を欲するあまり，あえてそのような方略に出ることがあります。

では，最後の型の無秩序型です。これも年齢によって違います。ごく幼い子どもで，無秩序型のアタッチメントの子どもたちはどうするのかというと，端的に言えば，どうにも出来ないわけです。子どもたちはいつも何らかの助けてほしい時にそばにいてくれない養育者には，何らかの組織立った，もしくは系統的な方略をとることが出来ません。幼稚園期か，あるいは初期の児童期ぐらいになりますと，無秩序なアタッチメントの子どもたちは相変らずその一部は方略なしと，お手上げ状態ということもあるのですが，一部の子どもたちは，役割の逆転などをしたりします。自分があたかも養育者のような役割を果たし始めるという方略に出ることがあります。「無秩序の 3 つの型」と真ん中に書

いてありますが，つまり，3 つの下位パターンがあります。無秩序である時，そして，年齢が上の時にはニーズがあると，一生懸命助けてくれと言ったかと思うや両価値型の反応を示し，あるいはそれが上手くいかなかったら，いやもういいです，私は独立独歩です，というように，ころころ変えて首尾一貫しないアタッチメントを示します。それが 1 番目です。2 番目は先ほど申し上げたように，養育者の役割が逆転するわけです。あたかも自分が養育者の役割を果たして，「あなたはこういうことが必要でしょうから私がやってあげましょう」と言わんばかりの行動を子どもがとって，役割逆転が起こります。あるいは 3 番目，懲罰的と書かれていますが，これも親の行動をコントロール，しかもネガティブにコントロールしようとするわけです。「お父さんお母さん，それは違うじゃないか，それは間違っている」と，いつもいつも親が間違っているから私が正すんですよという行動に出るのです。これも，3 つの行動の 1 つとして知られています。

では，アタッチメントとは何かと言う一般的な話をし，また，学齢児のアタッチメントには経緯も違うし種類もあるという話をしてきました。ここで 10 分間休みとしまして，第 2 部は，そのようにバリエーションのあるアタッチメントがあるのなら，どういうふうに対処していったら一番子どもの能力を伸ばして，精神衛生上よいアタッチメントを作り出すような行動がとれるのか説明していきたいと思います。

(休憩)

アタッチメントと精神的な健康，精神衛生がどう関連しているかという疑問ですが，ずいぶん古くからある疑問です。ボウルビー博士は子どもの精神科医で子どものメンタルヘルスには深い関心を示した人です。ボウルビー博士は臨床心理学者であり，そして研究者でもありました。1950 年代に彼がやった最初の研究ですが，子どもで非行，特に泥棒をやったという子どもを 44 名調べたということです。そして，その他に非行としては色々あるのですが盗み以外の非行と，盗みを働いた子どもとの比較研究を行いました。そして，何らかの家族の履歴などに特徴がないかを調べると，確かに親から離された，あるいは親がいなかったというのが子どもの盗み行動の確かな要因であるという研究結果がまとまりました。このような研究結果が出て，その他の研究結果でもエビデンスが出ているということ，それから自分自身も精神分析医であるということ，これを総合して考えてみると，親子関係の中で子どもたちが頼れる養育者をもつということが，精神衛生上，そして精神健康上非常に重要であると結論付けられました。

ボウルビー博士ですが，アタッチメントの子どもの精神的な健康について発言しています。次に出てくるのがボウルビー博士です。

★★ここでビデオ上映★★

世界保健機関の依頼を受けたのだと思いますが，1950 年代にボウルビー博士は子どもの精神的な発達と，それから精神的な健康にとって両親の養育，損失がいかに重要かという研究をしています。

このようにキャリアの初期からボウルビー博士は発達心理学，発達精神医学というものに大変関心をもっておられました。

今日，私はアタッチメントと子どもの精神的な健康を語っていきたいと思いますけれど，安定したアタッチメント，逆に不安定なアタッチメントになった時に，子どもたちの中に臨床的な症状が発症するのに影響するのではないか，内在的，外在的な問題が出てしまうのではないか，この因果関係を検証していきたいと思います。ただし，DSM で測られますようなアタッチメント障害を今日は話すわけではありません。これはあくまでも精神障害ですから非常に極端な状況下での障害ですが，今日はそのような話をするのではありません。先ほど不安定なアタッチメントのパターンを 3 つくらいお見せいたしましたけれども，そのパターンが何らかの子どもたちの精神衛生に関わっているという，それほどひどくない状況について話します。もし，臨床的な発生とアタッチメントとが関連していて，もし，相互関連があるのだったら，どのようにそれを説明出来るのかを申し上げて，最後に，簡単になると思いますけれども，アタッチメント理論の方から臨床に何か貢献するものがないのか，臨床的にこのように介入したら良いのではないかと示唆する情報があるのではないかとお話ししたいと思います。

アタッチメント理論の重要な部分です。能力仮説というものがあります。この学説によりますと，初期の安定したアタッチメントを形成出来た子どもには，その他の発達的な課題の準備段階をそなえることになる，すなわち，安定したアタッチメントはその後の人生の基礎となるという仮定があります。発達心理学者はこの問題に長くから関わっていろいろ調査をしたわけですが，概ね出ている結論としては，安定したアタッチメントが子どもの能力を強化するのに確かに役立っているらしいということが言われています。アタッチメントが安定していれば，例えばその子どもは他の子どもと概ね仲が良いとか，なんらか挑戦が突き付けられた時にへこたれないとか，何か問題があっても軽々には諦めない，頑張り通すとか，事が非常に平穏な時には，好奇心をもって色々探索してみたいという気持ちを示すとか，といったことが言われているのです。先生や仲間とより協力的であるので，学校によく適応して，学校のメリットを多くとるのが安定したアタッチメントをもつ子どもです。と同時に，自分に対して期待するので積極的であるとともに，現実的に自分に対する期待が出来るのです。

では，なぜ安定したアタッチメントはこのような結果をもたらすのでしょうか。いま私が申し上げただけでも，ずいぶん長いリストになったと思います。まず友達と仲が良い，自己認識が強い，つまり自尊心が強い，成績が良い，そんなに良いことづくめであるのだったら，ぜひそのようなアタッチメントを安定して形成したいものです。どうしたら良いのでしょうか。

安定したアタッチメントの 1 つの説明はこうなります。ある子どものアタッチメントが非常に安定していたら，それは直接的にその子のその後の人生の舞台を設定することになるのです。舞台というのは確実な避難所と安全基地があるということです。彼らはそれらを知っているから，自信をもって世の中に出て行きます。世の中に出て行くということはそれだけ色々な事象に関わることになりますので，それでまた経験をして，自立して，能力が促進されるという良い回転になると思います。そして，安定したアタッチメントをもつ子どもたちはその能力を元に社会に出て行き，他の子どもたちと触れ合う機会が多くなるでしょう。そうしますとお互い学習しあうという機会が増える。だからこの

ような結果になるということです。

また，安定したアタッチメントをもつ子どもは，それだけではないかもしれません。その他にも発達的によい経験や資質をもっていると言えるかもしれません。その 1 つの例として知的な発達が促されるというのがあります。どうして安定したアタッチメントをもったら学校でも成績が良く，知的な水準が高いのでしょうか。これをどう説明したら良いのでしょうか。どのような要因がアタッチメントとして認知形成と関係するのか，私たちは 3 年生と 4 年生を比べてみましたが，24 か月，34 か月で，生まれてから 3 年間のアタッチメントとの関係です。学校の成績や IQ を比べてみることによって，どうしてアタッチメントが認知形成に有利に働くのかという要素を探ってみることにしました。1 つの説明として，より良い安定したアタッチメントを作ってくれるような養育者の元で育ちますと，学校でより適応が出来るような親や養育者の助けがあるでしょう。これが 1 つの可能性のある要因で，学校ではがんばっていい成績を取りなさいよという励ましがあるでしょう。これも 1 つの要因と幸運です。それから，安定したアタッチメントを形成した子どもたちは，学校で協力的であると言われています。すると仲間から好かれるし，なんらかの課題を与えられたら先生や仲間たちと課題に取り組んで，活動することが増えて，その結果，うまくいくということがあります。これらはすべて要因の候補です。説明できる要因の候補なのではないかいうことで，すべてデータを取って調べてまいりました。星印がついているのは確かにエビデンスがあったというものです。確かにこのような強い要因の元で，安定したアタッチメントとはプラスの関係であることが確かめられました。

結論を申し上げますと，まず私たちは仮説を立てることから始めました。能力仮説と呼んでいます。「初期に安定したアタッチメントを形成することが出来たら，子どものその後の発達的な課題の準備となって，良い結果を生む」というその仮説に対して，良いエビデンスが出たと思います。確かに，安定したアタッチメントはその後の多くの発達的な結果と良い関係，プラスの関係にあるということがわかりました。それから今のものをもっとより良く説明するために，これだけではなく他の様々な要因を研究している途中です。

では，安定したアタッチメントで頭が良くなる，認知能力が上がるのだったら，反対だったらどうなるのか。反対ということは精神病理になるのか，そちらの方も研究しなければならないと思っています。アタッチメントは精神病理の発達に作用することがあるのか，内在的な問題，つまり不安や抑うつですね，それらを起こさないのか。そして外在的な問題である非常に攻撃的になったり，指示に従わなかったりというような行為ですけれども，それらがアタッチメントの不安定さと関係しているのでしょうか。

アタッチメントの不安定さと精神病理の相関関係に関心があって研究をしている，と言いますと，よく結論に飛びつこうとする人がいるのですけれども，では不安定なアタッチメントがイコール精神病理かというと，私はそんなことはないと思っております。また，アタッチメントを研究する多くの研究者はそのように捉えていないと思います。不安定なアタッチメントそれ自体で精神病理の兆候というわけではありませんし，先ほども申し上げましたが，アタッチメント障害ではありません。このセミナーでは，不安定なアタッチメントに対して色々行動的な特質が出てくるのかという，あくまで促進要因になるのかというそれを探ろうとしているわけです。それイコール病気ではありません。精

神病理のリスクのただ 1 つの要因かもしれません。あるいは，安定したアタッチメントであった時には，より良い精神状態にもっていく促進要因の 1 つであるかもしれません。子どもが安定的なアタッチメントだったら，臨床的にいわば困った状況の発現を抑える可能性に導いてくれるかもしれません。

では最初に，アタッチメントの外在的な問題との相関関係を探りたいと思います。仮説を 1 つ立てましょう。「不安定なアタッチメントの子どもが攻撃性，そして問題行動をより示しやすい」という仮説です。こういうふうな仮説を立てるにはそれなりの考え方があるわけです。それはどういうことかと言いますと，アタッチメントが不安定な子どもたちというのは，それを内在化することが出来ない，それを外に向けてしまって，大人たちの指示に従わないから，それが結局，問題行動に繋がってしまうのではないか，ということです。あるいは不安定なアタッチメントですと，他者に対して共感しない，すなわち気遣うことがないのではないか。そしてストレス下で自分の行動や感情のコントロールがうまく出来ないのではないか。だから結果的に，外に顕在化した問題を起こしてしまうのではないか。特に回避型，無秩序型の子どもでは外在化しやすいのではないかということです。両価値型ではなくて，むしろ回避型と無秩序型が特に外在的な行動を起こしやすいのではないかということです。

この仮定の下でたくさん研究がなされて，確かに私たちはエビデンスが出て来たと思っております。確かに，不安定なアタッチメントであったら外在化の問題と有意な問題がありそうだということです。外在化した問題行動であります。それは不安定なアタッチメントで回避行動が起こったり，あるいは無秩序なアタッチメントであったときには，特に外在化に関する強い関連が出てきそうだということです。

次は，アタッチメントと内在的な問題です。内在的な問題といいますのは不安感だったり，あるいはうつ状態，抑うつの状態になりやすいというこの仮説を立てました。ボウルビーが言っておりますけれども，養育者に確実な避難所とか安心感をもてないということ自体が，これはもう不安をかき立てているのではないか。あるいは抑うつの気持ちになっているのではないか。だから，このアイデアのもとにこの仮説が成り立つのではないかとボウルビーは主張しているのです。養育者がいなくなるかもしれない，自分のいてほしい時にいてくれないかもしれないという不安感や心配であるとか，あるいは養育者に私は捨てられたんじゃないだろうかという不安をもつわけです。また，不安定なアタッチメントは，今度は間接的に内在的な要因に結びつくのではないかということも考えられます。例えば仲間が作りにくい不安定なアタッチメントというのは，仲間関係が作りにくいので仲間に拒否される。そして，その拒否されたという経験がまた要因になって不安感やうつ状態の要因になってしまうことがあるのではないか。こうしたことが仮説の背景にはあります。

ただし，どういう不安定なアタッチメントがどのようなリスクになるのかというのは研究者の中では意見が割れるところでして，両価値的な不安定なアタッチメントの方が，より慢性的な内在化につながりやすいと言っている研究者がいますし，そうではなくて無秩序なアタッチメント，すなわちほとんど全然方略がない，一貫性がないアタッチメントの方がより深刻な内在的な問題を起こすのだと言っている研究者もいます。確かにたくさんの研究結果が出ておりますし，論文も出ておりますので関心のある方はぜひこれを見てもらいたいと思います。不安定なアタッチメントの子どもたちは，よ

り強い相関関係で内在化した症候群を発症しやすいものであるということです。これは，不安というよりは抑うつという方の顕在化のしかたの方が多いようです。それからまた，面白いと言ったら語弊があるかもしれませんけれども，回避型アタッチメント，両価値型アタッチメント，無秩序型アタッチメント，これら全てのアタッチメントはやはり要因となりまして内在的な問題を起こすとなっておりますが，より詳しく見ますと，回避型よりも両価値型，無秩序型の方が，より重篤な，内在的な問題を引き起こす要因である可能性が高いということが示されています。こちらも面白い点だと思います。

結論を上から読ませていただきますと，不安定型のアタッチメント，すなわち安定したアタッチメントがないときには確かに，内在的，外在的な症状と関連するらしいということです。回避型のアタッチメントの場合には内在的・外在的な症状の両方に関連しています。また，両価値型のアタッチメントの場合は特に内在化と，無秩序型のアタッチメントの中には内在化の症状と外在化の症状の両方に関連しておりまして，精神病理にもかなり行きつきやすそうだということです。安定したアタッチメントの欠如というのは，内在化と外在化の行動問題の指標と確かに関連しているらしいということです。不安定なパターンの中でも，無秩序といったらこれは特に重篤でありまして，両方のタイプの問題に一貫して結びついています。そして無秩序なアタッチメントのときには精神病理にかなり近くなりそうであるということです。もし，皆様方が乳児期のアタッチメントに関心をおもちでしたら，こちらに書いてあります，これは論文集なんですね。サマリーがまとめられたものですから，ぜひこれをお読みになられたらいいんじゃないかと思います。アタッチメントの専門家 25 人くらいですけれども，それぞれの論文を持ち寄りましてまとめたものでございます。ですから臨床家としてヒントを得たいというなら，ぜひ読んでいただきたいと思いますし，それから無秩序型のアタッチメントは慢性的な精神病理の症候群にどのように関連しているかもしれないか，それからもう 1 つ，アタッチメントの専門家として理解の限界ということも論じております。臨床家として，そして政策立案者として関心をおもちでしたら，おすすめいたします。

もともと私たちが始めた話は，アタッチメントと子どもたちの能力，そして幸せになって欲しいというところから始めたはずです。しかし，ここからの話はアタッチメントと内在化の症状について，いわば悪い方に焦点を当てての話になります。アタッチメントに欠陥があった場合，不安や抑うつがあったときに，感情障害や気分障害が起こるのでしょうか。

最初は不安定なアタッチメントと能力の関係で話を始めました。ではなぜ，安定か不安定かで内在的な問題に関連するのかという考察に膨らみました。そして，確実な避難所，安全基地の欠如，すなわち不安と抑うつがあったときに，どのように内在化の問題に導いていくのか。結びつきを説明する，そのように直接的な因果関係があるのか。あるいは，何らかこの 2 つが結びつくために，媒介メカニズムがあるのか，このメカニズムを通るので，ある変数に導かれて色々な資質が出てくるのか，ということを探っていきたいと思います。

良いアタッチメントと不安定なアタッチメントと内在化問題の中に，ひょっとしたらもう 1 つプロセスがあるのかもしれません。アタッチメントが不安なときには情動過程がそこにあって，その不安定なアタッチメントの子どもたちは，普通より違う情動的なメッセージを受け取ってしまっているの

ではないか。普通とは違う情動的な理解をしている，あるいはコントロールが違うから，それが原因となってそれを媒介して，内在的な問題を起こしてしまっているのではないかというのが 1 つの考え方です。

私がどうして情動，感情，情緒というのをわざわざもち出したのか。そして，なぜこれが媒介メカニズムとなっていると考えるのか，これが信じられるのかをご説明いたします。情動過程はアタッチメントと関係していると言われます。例えば，非常に安定したアタッチメントの子どもたちというのは，総じて感情コントロールが上手いと言われます。何らかのストレスを感じても極端な方に行かないように，ちゃんとコントロールをするということです。そしてまた色々な適切な対処方法を取るがゆえに，不安定なところから，不安，抑うつから脱する効果的なやり方を実行すると言われています。また，安定したアタッチメントが形成された子どもたちですけれども，概ねこれも日常生活の中で情動，感情といってもプラスの感情を示すことが多いと言われます。日々の生活の中で，両親に対するものであれ，遊び仲間に対するものであれ，彼ら彼女らの中の感情は総じて良い方の感情だという結果が出ております。

情動過程というのはアタッチメントと確かに関連しているようです。と言いますのも，アタッチメントが安定している子どもたちというのは，総じてエモーション，情動を表現するのが上手いと言われます。ですから，相手に対して上手く感情を表現することによって，お互いに混じり合って色々学ぶことができます。まず学習の道があるということがあります。それから，養育者に対して自分の情動を表現することに長けておりますから，養育者側も子どもたちをそのまま受け入れやすくなります。そして，子どもたちと強い絆を結びやすくなるという良い結果になるでしょう。それからまた，子どもたちとより良い安定したアタッチメントを築く両親というのは，感情が沸き上がった時にどうコントロールするのかを子どもたちに教える，良いお手本を示していることになるかもしれません。

もう既にエビデンスもあると思いますけれども，アタッチメントが精神的な健康と関係していますが，それだけではありません。情動過程というのも精神的な健康とまた確かに関係をしております。情動過程があるかないかということで，気分障害，感情障害をより良くコントロールできるからです。1 つ研究がございまして，1 つの例がここにも書かれてございますけれども，これは，子どもたちの感情と能力の分析をした研究結果です。不安を抱えている子どもたちは，自分の感情や情動を扱うのが総じて下手だと言われております。自分が不安であるという感情をなかなか表現できない，あるいは自分がどういう感情状態にあるのかという認識も低いし，結果，自分の感情を理解するのも不得意だといわれます。また，不安をもった子どもたちというのは，自分の情動の受容も低いと言われております。すなわち，悪い感情をもつという，こういうことは良くない，悪いと思い込んでいるわけです。悲しいという感情をもつことは悪いことだと，心を乱したり怒るのは悪いことであると考えています。あるいはその裏側にはより不安があると思われます。一旦そういう感情を私が受け入れてしまえば，もう私はコントロールできないと思ってしまうのです。それだけ，自分の感情の受容度は低い，自己効力感も低いということになります。自分の感情マネジメントにそれだけ自信がないのだと思われます。また，より不安な子どもたちというのはコーピングが色々出来ないということが書いてございますけれども，この星印を見てください。この星印は最も強く不安と情動能力の欠如といいますか，

これが一緒になっているということだと思います。そしてまた，非常に強く不安を感じる子どもたちというのは，その情動を適切に枠組みにはめて考えるのが不適切であるということがあります。もう少し具体的に言いますと，ある状況に直面して，その子どもが非常にこころに不安を抱えていた時に，往々にして何が起こるかといいますと，その出来事の非常に悪いところに焦点を合わせがちであるということです。あるいはあるイベントに必要以上に非常に破滅的であるということを考え出して，自分でそのような破滅的な状況であると思い込んでしまうのです。そのような欠如があります。

なぜ，不安定なアタッチメントが内在的な問題に関連していってしまうのでしょうか。その中に情動過程，あるいは情動のコントロールが出来ないという媒介メカニズムのせいで，最終的には内在的な問題になってしまうわけで，もしそうであれば，情動過程を正してあげる必要があるのではないでしょうか。例といたしまして，すでにこれは既知のものとしてわかっておりますが，不安定なアタッチメントの子どもの場合は，より自分の感情の認識が低い，しっかりと自分の感情が認識出来ないのであれば，よりそれで不安，不安定になってしまうという傾向があります。それからまた，安定したアタッチメントがない子どもたちというのは感情調節が出来にくいということがあります。自分の感情の認識が出来ないのであれば，自分はこういう状態です，という報告する能力があるわけではありません。その能力も低くなります。無秩序なアタッチメントの子どもの場合，何か事象を見た時には，その悪い面を大げさにとらえてしまうのです。大変なことが起こったと，大げさにとらえるという事は，それだけまた自分が不安になるということです。何か悪い事象が起こった際には「非常に恐ろしいことが起こってしまった」と，これは必要以上に恐ろしい枠組みにはめて思い込む傾向があります。

不安定なアタッチメントと臨床的な症状が，どうやら繋がっているらしい，と縷々話してまいりましたが，しかし，これだけが媒介メカニズムだとは考えないでください。臨床的な症状を捉えるには，もっとほかの複数の要因があるかもしれません。たとえば，不安定なアタッチメントの子どもの場合には，自己概念が往々にしてマイナスである，すなわち自尊心がマイナスの方に向いています。すると自己調節もしにくくなると，このような要因も考えられるでしょう。また，不安定なアタッチメントのときには，非常に外在的な行動に出やすいとするならば，たとえば攻撃的であるとか，反抗的であるというときには，もう少しほかに説明の仕方があるかもしれません。アタッチメントが不安定であるから，自分の行動調節がやりにくい，それが不得手であるのではないか。自分で自分の行動を律することが不得手ですから，攻撃的になるのだと，こういう回答も考えられます。

こう言いましたらやはりすべての影響要因を考えなければならないということで，私は 2 点を強調したいと思います。臨床的な症状を発症するのであるならば，それに影響がある可能性がある要因をたくさん盛り込んだ説明モデルが必要です。モデルだけではありません。最後の点になりますが，アタッチメントと内在化と外在化の問題がいかに関連するのか，仮説的なメカニズムを直接的に検証する研究が必要です。何を言っているかというと，アタッチメントの不安定さで内在的あるいは外在的な問題行動に結び付きそうだという，このエビデンスは充分あります。もうこれ以上エビデンスはいらないと思います。しかし，じゃあどうしてこっちからこっちに行くのかという説明をしっかり果たすような仮説的なメカニズムが，まだしっかりとありません。ちゃんとこう説明したらこう辻褄が合うのだというものは，これから立てていかなければならないメカニズムの説明だと思います。

これは 1 つの概念モデルです。不安が強い子どもは，どういうふうに要因が絡み合うと子どもが不安をもつようになるのか，その単純化したモデルです。しかし，この単純化したモデルでさえもこれだけ複雑でありまして，こういうふうな要因があれば，おそらくはこの子どもは不安の問題を将来抱えるであろうという予測であります。難しいわけです。特に臨床レベルになるような要因を抱える子どもを充分に説明するためには，モデルは多岐にわたるでしょう。

臨床的な問題をどうして子どもが発症するのか。1 つ教訓として大切なところがございます。発達的病理学とか，あるいは子どもが臨床的な問題を抱えるような不安の要因というのは，1 つで全部説明されるというのは滅多にありません。ですから，これをよく覚えておいて，1 つで全部解決ということはほぼ有り得ないんだ，たくさんの要因があるということを覚えておくべきだと思います。特に覚えておかなければいけないのは，やはりたくさんのモデルを考える時にも，たくさんのリスク要因が今度は積み重なってきた時には，累積的に危険因子は高まるということです。特に臨床的な問題になる時には，私たちの研究では 4 つか 5 つのリスク要因が積み重なってくる時には，限界に達したと言うべきでしょうか，内在的な問題として強い不安を抱える可能性が非常に強くなります。たとえば，不安定なアタッチメントの子どもである，この子どもは仲間と仲が悪い，そして 3 番目，感情のコントロールがしにくい，4 番目，両親も何らかの非常に強い不安を抱えている。こういうふうにだんだん積み重なってきますと，おそらく臨床問題に達するくらいの不安に達する可能性はかなり大きくなるでしょう。

では，最後の結論に入りたいと思います。アタッチメントとそれから精神病理の関係です。

不安定なアタッチメント，それひとつではかなり小さなリスクだと思います。あるいは逆に言いましょうか。ある子どもの問題が，不安定なアタッチメントだけが仮に問題だった場合，おそらくその子どもは臨床的な問題を起こさないでしょう。もうひとつの大切な点でありますが，不安定なアタッチメントというのは，リスクファクターの大きなグループの 1 つであるかもしれません。そのグループが全部，いろいろ自分の影響をどう行使して問題に発展しているかという，そのひとつが，不安定なアタッチメントかもしれません。ということで，私はアタッチメントの専門家であります。だから，アタッチメントに関心をもっている人間でありますし，アタッチメントが良いか悪いかというのが非常に重要な要素ということは分かっておりますけれども，しかしながら，子どもの能力と，子どもの精神的な衛生と幸福ということを考えますと，アタッチメントの欠如かそうでないかというのは，最も重要なリスクではないかもしれません。その他にもっと大きな重要なリスクがあるかもしれないし，それから，アタッチメントが不安定かどうかというのは，この子が後になって何らかの臨床的な問題行動を起こすようになるかどうかの予測をする，一番強い要素でもないかもしれません。その他にもっと正確に予測してくれる要因があるかもしれないのです。リスクファクターとして最も重要なものがアタッチメントかどうか，ということを知る唯一の方法としては，その他の要因候補と一緒に研究をして，比較検討して，その寄与度を調べるしかないと思います。そして，より幅広いモデルが出来たといたしましょうか。モデルを元に，幅広い比較研究がされたといたしましょうか。それは大変結構なことだと思います。と言いますのも，この子が将来，臨床的な問題を起こすかどうかの期待値をそこから引き出すことが出来ましたら，その中でアタッチメントの欠如がどのくらい重要な寄与率で

あったのかということを知る一助になるでしょう。また，どうして重要なのかという，なぜかという説明も探っていくことが出来ると思います。あるいは，アタッチメントとそのほかの重要要因とのリンク，繋がりも分かってくるでしょう。それを可能にしてくれるのが，より幅広いモデルだと思います。

最後になりましたけれども，やはりこれは 1 つ言及しておかなければならないと思います。臨床的なアタッチメントの影響です。これは私の専門ではありません。私は発達心理学者で臨床心理学者ではないからです。お聞きの皆さんの中にも臨床心理学の専門家の方がいらっしゃいますし，アタッチメントの研究家として彼らに貢献出来ることがあれば，ぜひしたいと思います。ケースの概念化と最初に書いてございますけれども，私たちは，アタッチメント理論を使っていただきますことによって，それぞれの症例の概念化に役に立つかもしれません。臨床的な問題に寄与している要因は何であるのかというのを理解していただけるかもしれませんし，今日，臨床心理学者の方々がどのようにアタッチメントというのは関与をしているのか，子どもたちの心理的な構成にどのような要因であるのか，あるいはこの情報をよく理解していただきましたら，後に研究者の先生方が親子関係の分析を違う側面から包括的にしていただけるかもしれません。2 つ目に，治療的なアプローチについて使えるものはないかと思います。私は概念化してアタッチメントの重要性をお伝えいたしましたけれども，アタッチメントはそれだけ重要であるのならば，不完全なアタッチメントを完全にしてあげるのが，子どもに対する治療アプローチになるのではないかと思います。経験論に基づいてではありますけれども，アタッチメント理論を使うことによりまして，幼い子どもの親に対するセラピーというのはずいぶん発展してまいりました。ただし，もう少し年が上の児童期の親に対しまして，アタッチメントの治療をしてあげるというプログラムはまだありません。皆さんも何らかですね，そのセラピーとかモデルを使って治療に貢献していただければと思います。

ところで，幼い子どもというのはだいたい 4 歳未満くらいで，その親に対する治療は最近出て来るようになりました。「幼い子どもと一緒の治療方法」というのはどういうことを示すかと言いますと，親たちに教えるわけです。どのように感受性が高くて，いつも利用可能な，必要な時にいるような養育者になるようにするにはどうしたらいいのですかということですね。ですから，親子として安定したアタッチメントを作るための教育をするわけです。サークルオブセキュリティ（安心感の輪子育てプログラム）と言いまして，日本でもこの治療法は一部導入されていると思います。ですからこのところでは，養育者に対して安全避難所，あるいはしっかりとした基地を用意するためには，親として養育者としてどのような役割を果たすのですかというのを教えます。また，メアリー・ドージャー博士が ABC(Attachment and Biobehavioral Catch-up)と言いますが，この手法を使っていらっしゃいますけれども，子どものいる前で，子どもと一緒に，親がプラスの行動をとるわけです。そして，そのプラスの行動を親が取れた場合には，賞賛に値すると褒められるわけです。子どもの前で良い行動を示しましたねと賞賛して，成長の一助にするという試みが行われています。また，これとは別に思春期のセラピーもあるのですけれども，思春期へのセラピーでしたら，そのアプローチは家族全体にアプローチをするという行為も行われますけれども，概ね特に強調されますのは子ども，あるいは思春期の子どもに直接働きかけまして，家族関係，親との関係を今一度再構築しませんか，というふう

に導きます。

最後になりますが，日本発達心理学会そして国際研究交流委員会の方々に感謝申し上げます。研究仲間と学生の方々，研究に協力してくださって本当にありがとうございます。NIH はお金を出してくださいましたね。すべての方々，そして通訳にも感謝いたします。ありがとうございました。

ご質問をお受けいたします。

★★質疑応答★★

【司会・近藤清美先生】

スライドの和訳が大変で，色々と正しくないところもあって申し訳なかったですけれども，それにも関わらず通訳さんが素晴らしかったのでとても助かりました。

今から質問タイムでマイクが回りますので，手を挙げてください。通訳さんがいらっしゃるので，日本語で質問していただいて構いません。どのような質問でも構いません。

【質問 1】

今日は本当にありがとうございました。私は今，自閉症の子どもたちの療育を仕事にしております。それと同時に 7 歳の自分の子どもを育てていて，いつも不思議に感じるのは自分の息子がアタッチメントを感じているなという部分，手段ですね。自分の子どもだったら「ママ―」と言って抱きついてくるという感じなんですけれども，それと自閉症の子どもたちのアタッチメントの感じ方は全く違う。顔を見ないでお母さんの膝にポンと乗る。またはおもちゃのところに行ってポンと置くといった感じで，感じているんですけれども。質問というのは，年齢によってアタッチメントを感じる手段はどう変わっていくのかです。例えば肌の接触だったり言葉だったりというところと，あとは自閉症の子どもさんたちとそのアタッチメント理論について，私にはまったく知識がありませんので教えていただければと思います。質問，この 2 点よろしくお願いいたします。

【回答】

面白い所見を紹介してくださったと思います。コミュニケーションの役割，アタッチメント形成のためのコミュニケーション，例えば肌を触れ合うということがアタッチメントの形成にどのように役に立つかということですね。それと，仰っておられましたけれども自閉症の子どもとアタッチメントの関係ですね。どうやって彼らがアタッチメントを形成するのかしないのか，研究が行われているということは良く知っていますが，私自身はあまり良く知りません。あるいは発達期の子どもであって，そして，いかに自閉症の子どもたちに安定したアタッチメントを可能なのか。可能であればどういう方向で形成していけば良いか，確かに研究していらっしゃる方があると思います。

近藤先生の方がお詳しいと思いますので，近藤先生がお答えになられてはいかがでしょうか。

【近藤先生のコメント】

自閉症のアタッチメントの研究史というのは古いので，古いデータもあるんですけれども，最近になってまたメタ分析した方があります。やはり自閉症の症状が重いと，どちらにしても全体的に見ると定型発達のお子さんよりも不安定型の方が多いです。自閉症の症状が重ければ重いほど，不安定型になる確率が高いとともに，知的障害を伴っていると無秩序型になる可能性が高いということは分かっているのですが，それは通常のストレンジ・シチュエーション法のコーディングシステムを使った場合で，それに対して議論があります。つまり，自閉症の常同行動を無秩序型の行動とごっちゃにしているのではないかというような議論がいま起こっています。これについては，結論が出たかなと思うとまた違うんだと，自閉症だからといって不安定型になるというのはおかしいんじゃないかという話が出て来て，こっちへ行ったりあっちへ行ったりで，結論が定まらないのです。ただ間違いないのは，自閉症があるということは養育に影響するので，養育行動が敏感ではなくなるのではないかということになるので，自閉症の子どもに対するアタッチメント理論に基づいた介入法も開発されています。その際には，やはり自閉症の行動特徴をしっかり教えることが大切ですけれども，それと共に基本は敏感性です。つまり，お母さんが敏感に関わることという基本は同じです。

【質問 2】

身体接触以外のアタッチメントが年齢によって違ってくるんじゃないでしょうか。と言うのもうちの息子が甘えんぼちゃん過ぎて。

【回答】

私が討論してまいりましたのは児童期です。これは 6 歳から 12 歳を対象にしたつもりですので，ご子息は 7 歳ということで，まさにこの児童期前期に当てはまります。その時期におきましては，徐々に親との非常に直接的なアタッチメントから離れまして，そしてだんだん，自分独自の行動をとり始めます。親はその傍にいつもいて欲しいという利用可能性の問題で考えますと，いつも近くにいなくても，自分が必要とすればその時にいてくれるだけでいい，という過渡期に当たるものであります。しかし，それは急に起こることではなく徐々に起こるわけです。ご子息がもし 11 歳であるならばそんなに体の接触を求めないで，親といるより仲間と遊ぶ方がいいや，というふうになってくるかもしれません。それから，文化的な要素もあると思います。それぞれの文化では，親と子がどの年代をもって肉体的な接触を離れるべきであるかというのはそれぞれ違うと思います。いつ，どの場で，どのくらいの年齢の時にこれだけ接触するかですね。アメリカのアイデアでは，特に家を離れた時に親子はあまりべったりしないものだ，という感覚があると思います。特に，家の外です。でも，おそらく日本では違うかもしれませんし，特に公共の場，公共のスペースではべたつかないというのがアメリカの良しとされることであって，日本ではもっと許容されているのであれば，これはもちろん違いとして出てくると思います。そして，子どもの養育の初期の時には，大いにですね，親子というのは肌を接するものですので，それがしばらく続いていくというのは自然なことで，全然意外なことではありません。しかしながら，それがいつまで長く続くかというのは，アメリカと日本で違いがあるので

しょう。

アメリカのケースですけれども，もし息子が 11 歳，12 歳になって母親がハグしようとしたら，おそらく息子は嫌がると思います。特に人前でそんなことはされたくないとなるでしょう。あるいは，そういう行動に母親が出た時に，周りの人が「え？」というような顔をするかどうかというのも，国によって違うと思います。私は最近イギリスの映画を観たんですけれども，そのワンシーンでは母親が息子と一緒に学校に行こうというわけですね。すると息子は一緒に行ってほしくないんです。でも我慢して母親が学校まで来ます。母親は，別れる時に熱烈にその子にハグするわけですね。そして母親が去ります。するとクラスメイトのあざけりの対象になる，というような光景がございました。それはお国柄であると思います。

【質問者】

ありがとうございました。私の息子が 11 歳，12 歳になった時に，私がハグしないように気を付けたいと思います。

【質問 3】

今のセッションで，アタッチメントネットワークについて触れていたか覚えていないのですが，例えば，有償の場で，教育現場とか学童期の教育現場でですね。アタッチメントネットワークというのを可能であればどのように構築していったら良いのか。またその辺り，理論や示唆があればお教えいただきたいです。

【回答】

アタッチメントネットワークのそもそもの考え方といいますのは，子どもがある養育者だけにアタッチメントを具体的に感じる，つまり，母とか父だけではなくたくさんの対象者があるのではないかということなのです。子どもがアタッチメントを感じるためには，ネットワークでアタッチメントの養育者，その対象者を感じるものである，という理論から導き出されたのがアタッチメントネットワークです。子どものアタッチメント理解にはこの方が，包括的に理解ができるでしょう。両親以外にも，子どものアタッチメントの対象になる人は，お爺ちゃんお婆ちゃんがいますし，きょうだいがいるはずです。学校でもアタッチメント対象がいるはずです。学校に両親はいませんので。ですから愛情対象になる人は学校にもいるでしょう。ですから，子どもを中心としたアタッチメントのネットワークとして考えたときに，そのネットワークにある人だったらいいわけです。いつも直接的に介入していないかもしれませんが，いざとなった時に，そのネットワークの中に踏み込んで，子どもの安全な場所とか基地になってあげられる人のことです。

英語ではこういう表現があるのです。「暴風，嵐の時にはどんな港でも良い」。だから，本当に危機状態になったら，背に腹を代えられなかったら，安全だと思った港にはどこに入っても良いわけです。そういう役割を果たすのが学校の同級生であっても，なんら構わないと思います。ある子どもが悲しい，あるいはすごく落ち込んでいるときに，アタッチメント対象の代わりになるのが同級生であると

いう可能性がありますし，先生にも大いに可能性があると思います。そして，これは研究がされていますが，幼稚園期の場合，子どもたちはアタッチメント対象として保育士さんたちを選ぶ，感じるということもあるのだと言われています。ただ，児童期まで成長しますと，これは良くわかりません。日本でもこの研究はされたと思います。児童期になった時に，あなたは好きな人，アタッチメント対象は誰かと聞かれても，具体的に誰々さんと，子どもたちはあまり話さないんですね。でも，先生と話をしてみましたら，どうやら学校が始まる 1 年生とか幼稚園の年少組，入ったばかりには，先生とか保育士さんたちがアタッチメントの対象になってサポートをしてくれる，ということが非常に良くあるようであります。と言いますのは，学校に入ったばかり，幼稚園に入ったばかりの過渡期ですから，これはそのときに頼る相手があるということで，これらの人がネットワークの中のアタッチメントの対象です。ただし，最後の点でありますけれどもまだ研究されていませんので，憶測の域を出ません。

ただ，ご質問のアタッチメントネットワークには別の側面もあります。すなわち，ネットワークの中では両親だけではなく，そして子どもの人生の周りにいるすべての大切な人が重要ではないかということだと思います。このネットワークの中にある人は，みなそれなりに，子どもに安全，避難所でありますとか，安全な港の役割を果たす可能性があるわけです。例えば必要とあらば，お爺ちゃんお婆ちゃんたちが介入して追加的なサポートをするとか，あるいは，両親が自分の問題で手いっぱいで養育どころじゃないということがあるかもしれません。アメリカの例を考えますと，これは合成麻薬なんですけれどもオピオイド中毒というのが広まっておりまして，アヘンに近い作用を起こす合成麻薬なんです。こういう両親ともにこの中毒になってしまった時には，両親としてふさわしくありません。その時には祖父母が代わって面倒を見るとか，あるいは家庭問題に極めて詳しい先生があれば，踏み込んでサポートして，子どもの必要としているニーズに応えてあげるというのが，可能性としてはあります。非常に有名な研究がありまして，これは子どもの回復力を測った研究です。女性のワーナー博士の行った研究です。その研究対象になった子どもたちは，リスク要因を 4 つとか 5 つとか抱えておりまして，ハイリスクグループに入るような子どもたちばかりでした。ここで，まずまず生き残って，しのいで生き残っていくかどうかという弁別要因は何かと言いますと，その弁別要因は上手くいった子どもたちの共通項が 1 つあったのです。子どもたちに聞いてみたら「全てあの先生だ」という名を示したということなんですね。あの先生は私のことを思いやってくれた，あの先生が優しくしてくれたと全ての子どもたちが返答できたということです。

【近藤先生】

時間になりましたのでそろそろ終わりたいと思います。

本当に感謝の拍手をして終わりたいと思います。

学齢児での精神的健康に対するアタッチメントの役割

Kathryn A. Kerns
Dept. of Psychological Sciences
Kent state university

子どもの精神的健康を促進する

- 社会的ゴール：子どもの能力と幸福を促進する
- 発達心理学: どの要因が能力と幸福を促進するのか？
  - 一つの答え: 家庭

児童期でのチャレンジ（6歳から12歳）

- 子どものより大きな自律性に対して親子関係の再交渉
- 学校での要請や学校での成功への圧力が増す
- 仲間関係や仲間の世界での居場所を見つけることが，子どもにとってますます重要となる
- 他者からの現実的で否定的なフィードバックにますますさらされるようになっても自尊心を保つ必要がある
- 成熟と自己調節(行動と情動）がよりよくできる期待をもつ

親子関係: 幸福を促進するどのような役割があるのか？

話の概略

- アタッチメント理論からの導入的なアイディア: 学齢での親子関係で何が重要なのか
- 親子のアタッチメントが子どもの能力や精神的健康にどのように関係するかについてわかっていることを記述する
- なぜ，精神的健康にアタッチメントが影響を及ぼすのか，他の要因と絡めて議論する

第1部: 児童期のアタッチメント

- アタッチメントとは何か
- 児童期における変化

「アタッチメント」の意味

- ブレサートン：広義vs狭義の言葉の意味
- ボウルビィとエインズワースの視点
  - アタッチメント：特定のタイプの情緒的きずな
    - 「親密な」や「重要な」よりもっと特別なもの
  - 子ども期においては，親や他の養育者とのつながりがアタッチメント
    - 標準的で普遍的
  - 生物学的機能：保護
  - 心理学的機能：安心感

ボウルビィ・エインズワースのアタッチメント理論

- 子どもは，確実な避難所であり安全基地として働く養育者にアタッチメントを形成する

確実な避難所 ⟷ 安全基地

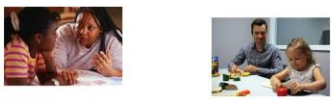
アタッチメントの質の多様さ

すべての子どもはアタッチメントを形成するが，そのすべてが最適というわけではない。

安定したアタッチメントを形成した子ども

- アタッチメント対象の利用可能性と反応性に信頼をおいている。
- 確実な避難所や安全基地としてアタッチメント対象を効果的に利用することができる。

アタッチメントは生涯を通じて重要，初期の数年だけではない



アタッチメントの発達的視点：年齢による変化

- 乳児期：養育者に対するアタッチメントの出現
  - 生後1年間の発達：特定の人へのアタッチメントの形成
- よちよち期（幼児期前期）：安全基地行動の強化
  - 安全基地行動を取る能力の改善
- 幼稚園期（幼児期後期）：アタッチメント対象とのコミュニケーションの増加
  - 目的修正的パートナーシップの始まり（子どもは親の視点に気づく）

児童期のアタッチメント（6歳から12歳）

児童期のアタッチメントの4つの特徴 (Kerns & Brumariu, 2016)

- 親の利用可能性がセットゴールとなる
- 親が第一のアタッチメント対象
- 親が確実な避難所であり安全基地でもある
- 共同的パートナーシップの出現

アタッチメントシステムのセットゴールは，アタッチメント対象への近接よりもアタッチメント対象の利用可能性による (Bowlby)

分離への耐性がます。

親から離れる時間が増す。

親は第一のアタッチメント対象;
他の人は第二

親と仲間が児童期には重要

- アタッチメント対象　対　遊び仲間
- 親は第一のアタッチメント対象
  - アタッチメント対象が必要な状況で，第一の選択肢，たとえば，悲しい時，怖い時

アタッチメント対象は確実な避難所であり，安全基地でもある

それほどの頻度がなくても確実な避難所であり続ける。

児童期後期や青年期になると，安全基地としてのサポートがもっと重要となる。

母親は確実な避難所としてもっと重要に，父親は安全基地としてもっと重要に？

監督的なパートナーシップの出現: アタッチメント対象との接触に共同調節が増す。

「監督的なパートナーシップ」の出現する年齢: 児童期 (Waters et al., 1991)

- 児童期に目的修正的パートナーシップが出現する。

共同的なパートナーシップとしてのアタッチメント

- 子ども: アタッチメント行動の相互的調節の責任が増す
- 子どものコミュニケーションと共同意志決定が重要

児童期でのアタッチメントはどのようなものか？

物語課題

何が安定したアタッチメントの発達を促進するのか？

- 理論：第一に影響するのは養育の質である。
- 敏感な養育
  - 注目を引こうとする子どもの試みへの反応性
  - 行動は同期していて相互に連関している（相互性）
  - 受容的
  - 協調的
  - 非介入的
  - 暖かい?
- 敏感な養育は，幼い子どもの研究では，安定したアタッチメントと関係する。

年齢が上の子ども（6歳から17歳）でのアタッチメントと養育

- 反応性/敏感性のある養育が依然として第一に影響を及ぼす。
  - 母親と父親で言えるが，反応性はもっと強く母親で関連する
- しかし，親は確実な避難所と安全基地として働くが，安定したアタッチメントを促進する他の養育行動も行う。
  - 自律性のサポート
  - 厳しいコントロールがない
  - 行動のコントロールにもっと頼る（理由づけの使用）

ここまでの焦点：アタッチメントの安定性

- アタッチメントの安定性を次元として議論してきた；ある子どもは他の子どもよりも安定している
- すべての子どもが安定したアタッチメントを持っているのではない
- もし，安定でなかったら:子どもは，敏感でない養育者に対する行動や情動を組織化して異なったやり方を示す異なる形の不安定なアタッチメントを形成する

不安定なアタッチメント・パターン

- 何が幼い子どもに見られる共通したパターンか？
  - 回避型アタッチメント
  - 両価値型アタッチメント
  - 無秩序型アタッチメント

不安定なアタッチメント方略: 不適切な養育環境への反応

- 回避型: ストレスのある時にアタッチメント対象に頼れない。
  - 子どもが否定的な情動を経験している時，親が子どもの必要性の信号を拒絶する。
  - 子ども: 関係を保つためにアタッチメント対象を求めないことを学ぶ；援助への期待の低さ
- 両価値型: アタッチメント対象についての慢性的な不確かさ
  - 子どもの苦痛の反応への親の一貫しないか的外れなさま
  - アタッチメント対象から注意を得たり接触をもつ手段としての子どもの過活性されたアタッチメント行動；援助を得ることの不確かさ
- 無秩序型: 親が保護的な存在とはなりえていない
  - 虐待的，無視的，圧倒されている，利用可能ではないが，拒絶的ではない親
  - 子どもは適切なケアを受け損なっている；幼い子どもにとっては世話が欠如して脅かすようなケア

乳児におけるアタッチメントパターン：古典的なストレンジ・シチュエーション

- ウォーターズ博士のビデオ

https://www.youtube.com/watch?v=PnFKaaOSPmkも利用可能

年齢の上の子どもでの回避型

ストレス状況でアタッチメント対象を求めないことに加えて…

幼稚園期より上で: アタッチメント対象とのコミュニケーションの低さ，特に内面的な考えや気持ちについて

児童期: コミュニケーションの親密性の低さが続く，アタッチメント対象へ頼ることが少ない
- テーマ:「事なかれ主義」，アタッチメントへの注意を避ける
- 影響: 回避型の子どもは感情を内に秘め，拒絶するよりも社会的規範を示す（例えば，再会で最小限の抱擁，親への否定の低さ）
- 行動から，子どもは「独立独歩」を求めていると見える

年齢が上の子どもの両価値型

年齢が上の子どもでの大げさにする方略はどのようなものか？

幼稚園期: 強い必要性と依存性の信号を送り続ける

児童期:アタッチメント対象への依存性が強く，情動の表現は強いかもしれないが，新しい方略が出現し，アタッチメント対象との接触を強く促進する。
- 葛藤と挑発: 親に否定的な感情を引き起こして養育者の現在の関与を確実なものとするやり方 (Hans et al., 2000)

年齢が上の子どもの無秩序型

幼い子どもでは明確な方略がない。では，年齢の上の子どもでは？

幼稚園期/初期の児童期: アタッチメント対象が世話をしそこなうことへの反応として統制的な方略が出現する； 子どもによっては役割逆転

無秩序の3つの型:
- 混乱/首尾一貫しないアタッチメント：明確な方略がない
- 統制的世話: 子どもは親に対する養育者の役割を取ろうとする
- 懲罰的コントルール: 子どもは厳しく，統制的な親の役割を取ろうとする

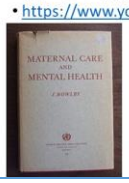
- 無秩序型アタッチメント: 子どもにおける最も問題となる結果と関連

第二部: アタッチメントと精神的健康

- いかにアタッチメントが子どもの能力と精神的健康に関係するのか？
- 何がこれを説明するのか？

アタッチメントと精神的健康

- **なぜいくつかのケースでは，発達が曲がってしまうのか？**
  - **ボウルビィ**: 子どもの精神科医
  - 彼の最初の研究の一つ: 44名の子どもの泥棒を調べた; これらの子どもを他から分けるのは親からの分離や喪失
  - https://www.youtube.com/watch?v=8ljZ4a8Uc8Q



アタッチメントと子どもの精神的健康

- 考察課題: 安定したアタッチメントや不安定なアタッチメントが臨床的症状を発達させるのに影響をもつか？
  - 内在化，外在化問題
- DSMのアタッチメント障害については議論しない; それほどひどくない状況で見られる不安定なアタッチメントを考える
- もしアタッチメントが臨床的症状と関連するなら，これはどのように説明できるのか？
- アタッチメントは臨床的アセスメントや介入に情報をもたらすか

能力仮説

初期の安定したアタッチメントは子どもにとって他の発達的チャレンジの準備となる (Weinfield, Sroufe, Egeland, & Carlson, 2008)

- 安定したアタッチメントは後の能力の基礎となる
- 初期のアタッチメントは重要

能力仮説の証拠

- Sroufe & Egeland: ミネソタ研究
  - 誕生から子どもを追跡
  - ハイリスク（貧困）サンプル
- 安定したアタッチメントが縦断的に関連するのは:
  - 仲間関係能力,挑戦時のレジリエンス，探索，学校適応，自尊心，内在的・外在的症状
- 類似の結果をもたらした他の縦断的研究: たとえば，Mary Main, Karin and Klaus Grossmann, Howard and Miriam Steele, Carollee Howes, Grazyna Kochanska
- NICHD初期保育所研究: アタッチメントと学校での達成，IQ，仲間関係，自己調節 (Kerns研究室)

児童期でのアタッチメントと能力

- **より後のアタッチメントの重要性**
- 能力仮説のさらなる確証
  - 仲間関係能力と友情 (Kerns et al, 1996; Contreras et al., 2000; Abraham & Kerns, 2013)
  - 学校適応 (Kerns et al, 2000; Kerns et al., 2015)
  - 不安と抑うつの症状 (Brumariu & Kerns, 2010; Kerns et al., 2011; Stuart-Parrigon & Kerns, 2016)

なぜ，安定したアタッチメントはこれらの結果と関係するのか？

- 安定したアタッチメントが直接，舞台を設定する; 確実な避難所と安全基地があると知ることが，世の中にもっと関わらせ，こうした経験が能力を促進する。
- 安定したアタッチメントをもつ子どもは発達的結果のいくつかを説明する他の資質や経験をもっている。
- 例: 認知発達　なぜ，安定したアタッチメントをもつ子どもは学校でよくできるし，もっと知的なのか？ West, Mathews, & Kerns, 2013

なぜ，アタッチメントは後の認知的成績を予測するのか？

- 4つの可能性:
- **アタッチメント一教示仮説**: 安定したアタッチメントをもつ子どもの親は良い教師であり，学校での成功を励ます。
- **社会的ネットワーク仮説**: 教師や仲間と良い関係が学校に関わる最適な風土を作り出す。
- **アタッチメント一共同仮説**: 安定したアタッチメントをもつ子どもは学校の文脈での引き続く要請により共同的
- **アタッチメント自己調節仮説**: 安定したアタッチメントをもつ子どもは学校でより動機づけられ，自己調節もうまい

アタッチメントと認知的成績 (West et al, 2013, *Early Childhood Research Quarterly)*

- NICHD保育所サンプルでの研究 (*n* = 1253)
- 初期の3年間で3回の行動的評定でアタッチメントが評価された
  - 15カ月 (ストレンジ・シチュエーション)
  - 24カ月(アタッチメントQ分類法)
  - 36カ月 (変容されたストレンジ・シチュエーション)
- 認知的成績: 3年生と4年生（8歳から10歳）で評価
  - 学力 (学校での成績)
  - IQ (Woodcock-Johnsonテスト)

どの要因がなぜアタッチメントが認知的成績と関係するのかを説明するのか？

	学校	IQ
母親の助け	*	*
母親の学校についての励まし	*	
教師の親密性と葛藤		
仲間から好かれやすさ	*	*
学校での共同	*	*
抑制的コントロール		
満足遅延耐性	*	*

結果は24カ月と36カ月のアタッチメントで同じ

結論

- **能力仮説**:初期の安定したアタッチメントは子どもの他の発達的チャレンジの準備となる(Weinfield, Sroufe, Egeland, & Carlson, 2008)
- この仮説に対する良い証拠
  - 安定したアタッチメントは多くの発達的結果と関係する
- この関連を説明するための様々な要因を調べるのにいくらかの進展がある

アタッチメントと精神病理

- **アタッチメントは精神病理の発達に役割を果たすか？**
  - 内在化問題 (不安，抑うつ)
  - 外在化問題
  - 精神病理: 低い能力以上 (たとえば，しばしばディストレスを含む; Masten)

発達精神病理学的モデル

いかに精神病理の発達を説明できるのか？

- **同等の終結の法則** (多くの異なるリスク要因が同じ結果と関係する)
  - 例: 不安: アタッチメント，養育，気質，家庭内ストレスと関係
- **多様な終結** (ある一つのリスク要因が多様な問題と関連する)
  - 例: 養育が不安や抑うつ，行為問題，境界性パーソナリティ障害に関係する
- **障害の発達: 単一リスク要因の存在とつながることはめったにない**

アタッチメントと精神病理: 可能性のあるモデル

- 不安定なアタッチメント ≠ 精神病理
- それが，あるいはそれ自体で，精神病理の兆候というわけではない
  - DSMのアタッチメント障害: このセミナーで議論していることとは別のもの
- **不安定なアタッチメントは精神病理のリスク要因; 安定したアタッチメントは促進要因**
  - 子どもの臨床的症状の出現の可能性に影響する寄与要因となりうる

アタッチメントと外在化問題

仮説: 不安定なアタッチメントをもつ子どもは攻撃性や行為問題をより示しやすい

- あまり内面化しないし，大人の基準に従わない
- 他者に対して共感しないし気づかわない
- ストレス下で行動や感情の調節がうまくできない (たとえば，不安定なアタッチメントは低いエフォートフル・コントロールと関連する; Pallini et al, 2018)
- **回避型，無秩序型の子どもは，特に外在化問題を示しやすい**

アタッチメントが外在化問題と関係するという証拠

外在化行動問題

- Fearon et al. (2010) メタ分析，幼い子どものアタッチメントの行動的尺度と外在化行動
  - 不安定なアタッチメント，回避型，無秩序型が外在化行動と関連する
- Madigan et al. (2016) メタ分析，アタッチメントの表象的尺度と外在化行動
  - 不安定アタッチメントや無秩序方は外在化行動と関連する

アタッチメントと内在化問題

- **仮説: 不安定なアタッチメントをもつ子どもは不安や抑うつの症状をより示しやすい**
- 利用可能な確実な避難所や安心感が欠けていることやそれ自体が不安や抑うつ的な気持ちをもたらす(養育者の利用可能性を心配する，養育者に見捨てられた気持ち)
- 不安定なアタッチメントが間接的に内在化要因と結びつく(たとえば，仲間関係)
- **不安定なアタッチメント: 誰がリスクにあると概念化したか？**
  - **両価値型？**(Rubin, Perry, Sroufe)
  - **無秩序型？** (Moss, Brumariu & Kerns)

アタッチメントが内在化問題と関係する証拠

内在化行動問題

- Groh et al. (2012), Madigan et al. (2013): メタ分析，幼い子どもでのアタッチメントの行動的尺度と内在化症状
  - 不安定型（対安定）アタッチメント: 内在化症状（小さな効果量）と関連する
  - 回避型アタッチメント: 社会的ひきこもりと関係する
  - 両価値型アタッチメント: 予測因ではない
  - 無秩序型: 知見がはっきりしない
- Groh et al: 無秩序型は内在化症状のリスク要因ではない

年長の子どものサンプルでのアタッチメントと内在化症状

- Madigan et al. (2016): メタ分析，アタッチメントの表象的尺度と内在化症状
  - 不安定なアタッチメントは多くの内在化症状と関連(不安よりも抑うつで大きな効果)
  - 回避型と両価値型，無秩序型アタッチメントはすべて内在化症状の高さと関連 (回避型アタッチメントでは効果はより低い)
- すべてのアタッチメント・パターンが内在化症状と関係すると言った強固な証拠

結論

- **不安定アタッチメント (安定したアタッチメントがない)は内在化・外在化症状と関係する**
  - 結果は様々な年齢の子どもで見られる
  - 結果は，アタッチメントの行動的，表象的，質問紙尺度で見られる
- **回避型アタッチメント**: 外在化症状 (アタッチメントの行動的尺度) と内在化症状と関連
- **両価値型アタッチメント:** 内在化症状（アタッチメントの表象的尺度）と関連
- **無秩序型アタッチメント:** 内在化症状 (アタッチメントの表象的尺度)と外在化症状に関連

結論: アタッチメントと精神病理のリスク

- 安定したアタッチメントの欠如は，内在化と外在化の行動問題の指標と関連する
- 不安定なパターンの中でも，無秩序型は両方のタイプの問題ともっとも一貫して結びつく，無秩序型の子どもは精神病理の特別なリスクをもつのか？
- Granqvist et al., 2017, *Attachment and Human Development*

乳児期の無秩序型アタッチメント: 臨床家と政策立案者に対する現象とその影響についての評論

ここからの話の注意点: アタッチメントと内在化症状に焦点をあてる

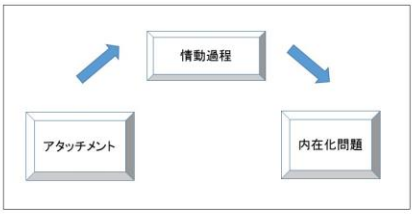
- 感情障害のリスク要因としてのアタッチメント (不安と抑うつ)

なぜ，安定・不安定なアタッチメントが内在化問題に関連するのか？

- **確実な避難所と安全基地の欠如の直接の結果**
  - ボウルビィ: 利用可能な養育者の欠如
- **結びつきを説明する媒介メカニズム**
  - 安定したアタッチメントが内在化症状の発達を緩和する他の特質を導く
  - 感情障害にとって: 情動過程が重要だろう

なぜ，不安定なアタッチメントが内在化問題に関連するのか?

情動過程（たとえば，情動調節）が媒介メカニズムか？



情動過程: 媒介メカニズムか？

なぜもっともらしいメカニズムか？

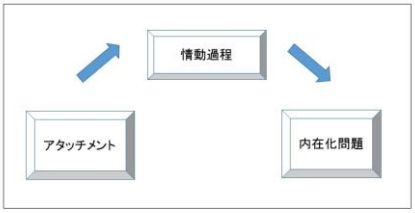
- 情動過程はアタッチメントと関係している（今あるメタ分析での証拠: Cooke et al., 2016; Cooke et al., in press)
- 情動過程は，感情障害を含む精神的健康と関係している
- 例: 不安と情動能力のメタ分析 (Mathews, Koehn, Abtahi, & Kerns, 2016)
  - どの情動能力が不安と関係するのか？

情動能力は不安と関連する (Mathews et al., 2016)

情動表出
情動認識 *
情動理解
情動の受容 *
情動の自己効力感*
社会的サポート求め
回避的コーピング
外在化コーピング
不適応な認知的コーピング*
**** = 最も強く関係**

なぜ, 不安定なアタッチメントが内在化問題に関連するのか?

情動過程（たとえば，情動調節）が媒介メカニズムか？



情動過程が媒介メカニズムである証拠: アタッチメントと不安

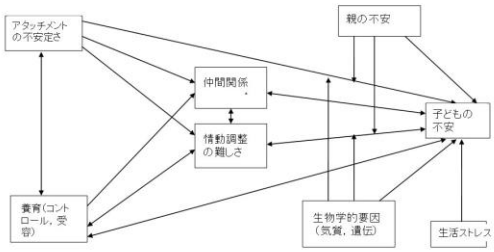
- **前青年期でのアタッチメント，情動過程，不安** (Brumariu et al, 2012; 10歳から12歳での横断的研究)
  - 安定したアタッチメント → 情動認識 → 不安
  - 無秩序型アタッチメント → 破局化（大げさにする）→ 不安
- **初期のアタッチメント，情動調節不全，前青年期の不安** (Brumariu & Kerns, 2013; 12年間の縦断研究)
  - 安定したアタッチメント → 情動マネジメント→ 不安

アタッチメントと臨床的症状: 探索すべき他のメカニズム

- 自己概念
- 自己調節
- 養育
- 道徳発達

- **複数の要因をとらえるモデルが必要**
- **なぜ，アタッチメントと内在化と外在化行動問題が関連するのか，仮説的メカニズムを直接的に検証する研究が必要である。**

不安の発達に関係した要因の単純化した概念モデル (Kerns & Brumariu, 2013)



アタッチメントと精神病理: 幅広い文脈を考慮に入れる

- 発達的精神病理モデル: 複数の要因を強調する
- アタッチメントは，精神病理の発達に影響するただ一つの重要な変数である。
- アタッチメントは，精神病理の発達を特異的に予想するのか？

Kerns, Siener, & Brumariu (2011)

- NICHD初期保育所研究のデータセットでの研究
- 児童期で不安に関係した要因: 何が不安の変化を予測したか？
  - 縦断的研究

要因の3つのセット:
- 母子関係 (アタッチメント，養育)
- 家族の文脈 (母親の不安，ライフイベント)
- 子どもの特徴 (気質，思春期の発達，性別)

5歳から12歳の不安の変化の有意な予測因

予測因	勾配: 変化（幼稚園から5年生）の予測因
母子間のアタッチメント	*
母親の敏感性	
母親の不安	*
否定的なライフイベント	*
抑制的な気質	*
思春期の発達	
子どもの性別	

最後の結論: アタッチメントと精神病理のリスク

- 不安定なアタッチメント; それ自身で，小さなリスクを与える
- リスク要因の付置の一部として理解することが重要と言える
- 最も重要なリスク要因とは言えないかもしれない
- 効果は，他のリスク要因によって媒介されている可能性がある

臨床活動へのアタッチメントの影響

- ケースの見立て
  - 臨床的問題に寄与している要因について理解したことを伝える
- 介入的アプローチについて伝える
- 幼い子どもの親に対するセラピストは，いかに反応的で利用可能な養育者になるかを親に教えることに焦点づける
- 青年期のセラピストは，アタッチメントのモデルについて見直しをするのを助ける

ありがとう

- 日本発達心理学会
- 国際交流委員会
- 研究仲間と学生の協力者
- National Institutes of Health
- すべての皆さん